産経新聞　平成28年（2016年）9月23日　金曜日

苦難だらけ自転車旅「嘘のない映画に」

聴覚障害者の監督 新作を公開

きょうの人

今村彩子（いまむらあやこ）さん（37）

「苦手なコミュニケーションと向き合うことで、自分自身のスタートラインにしたかった」

平成12年に映像作家として出発し、同じ聴覚障害者にカメラを向け続けてきた。東日本大震災後は、被災地に直行。音のない災害に直面した人々を追ったドキュメンタリー「架け橋　きこえなかった3・11」（25年）を発表し、ドイツの映画祭で観客賞も受賞した。実績を重ねた昨年夏、思い切って自らが被写体となった。

公開中の「スタートライン」（30日まで、東京・新宿のケイズシネマ）は、自身が自転車で日本縦断した57日間をたどるロードムービー。厳しくも情深い伴走者兼撮影者の堀田哲生さん（41）と、沖縄から北海道まで3824キロを駆け抜けた。

「2年前、母と祖父を相次いで亡くし、死を考えるほど落ち込んだ。『聞こえない』を言い訳にせず、前向きに生きるため、旅先で人と触れ合おうと思った」

各地の人々との心温まる交流を描くはずが、実際の旅は荒天でずぶぬれ、道は間違える、伴走者と大げんか…。困難の連続だった。複数の人との会話も読唇術で対応しきれず、いらだって涙する姿など、〝格好悪い自分〟が写っている。

「嘘のない映画にしたかった。できなかったことを作品にするしかなかった」

映画の終盤、日本語の分からないオーストラリア出身の聴覚障害者サイクリストと出会い、伴走者が増える。大自然の中ただただ北を目指し、言語も音も超え行き交った感情。自然体のコミュニケーションの原点を、爽やかに見せた。

（飯塚友子、写真も）